

## カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における口蓋垂音

鈴木 博之

四郎翁姆

復旦大学

ボン大学

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、口蓋垂音、年代差、スタイル

### 1 はじめに

本稿では、カムチベット語 Minyag Rabgang (木雅熱崗) 方言群 Lhagang (塔公) 方言<sup>1</sup>に認められる口蓋垂音について論じる。これまで、青年層を対象にした記述言語学的研究において、Lhagang 方言では口蓋垂音が弁別的にも、音声変異的にも用いられないものとして記述されてきた (鈴木 2006; 鈴木、四郎翁姆 2016)。ところが、老年層からの語りの収集過程において、口蓋垂音が弁別的に用いられていることが分かってきた (Suzuki & Sonam Wangmo 2017c, 2018, to appear)。

Lhagang 方言が属する Minyag Rabgang 方言群の記述研究では、口蓋垂音を音体系に認める方言があり、たとえば鈴木 (2007) や達珍拉姆 (2020) などが記述している。Lhagang 方言をめぐるのは、Dawa Drolma (2016) が口蓋垂音を記述している。また、Lhagang 方言の分布地域を取り囲むように分布するアムドチベット語にも口蓋垂音が認められる (鈴木 2015; Suzuki & Sonam Wangmo 2016, 2019)。

このような背景を考慮に入れると、筆者の語彙・文法調査の対象としてきた若年層の話す Lhagang 方言は、「口蓋垂音を失った」のではないかと考える。チベット系諸言語における口蓋垂音をめぐっては、さまざまな論考があり、歴史言語学的に注目されている。チベット文化圏東部には多くの非チベット系チベット・ビルマ諸語が話されており (Roche & Suzuki 2017)、羌語支に分類される諸言語には、口蓋垂音を含む子音体系をもつ言語が多い (黄布凡 2012)。このため、同地域で話されるチベット系諸言語における口蓋垂音はこれらの言語との接触によると考える研究がある (孫宏開、王賢海 1987)。一方、チベット系諸言語の古期の音体系をある程度反映していると考えられるチベット文語 (以下「藏文」) 形式には規則として口蓋垂音を表記する体系がないことから、藏文成立時に参考とされた自然言語には口蓋垂音が体系的に存在しなかったであろうことが示唆される。しかしながら、チベット文化圏東部に分布するチベット系諸言語には、口蓋垂音を音体系に含むものが少なからず存在する。筆者は、次のような3つのタイプに分類できると考える。

---

<sup>1</sup> 中国四川省甘孜藏族自治州康定市塔公鎮塔公村で話される言語である。Lhagang 方言の社会言語学的特徴の概観については、Suzuki & Sonam Wangmo (2015ab, 2017a) を参照。文法特徴の概観については、鈴木、四郎翁姆 (2016) を参照。

1. 摩擦音のみ、もしくは摩擦音に加えて音節末子音としてのみ閉鎖音も現れるもの  
アムドチベット語諸方言に認められる(格桑居冕、格桑央京 2002:192; Haller 2004:19; 王雙成 2012; 海老原 2019:18; Tsering Samdrup & Suzuki 2019:258)。ただし、音韻分析の方法によっては、軟口蓋摩擦音に帰納する分析もある(華侃、龍博甲 1993:3; 邵明園 2018:24)。
2. 閉鎖音、摩擦音について、相当程度限られた語彙形式の初頭子音として現れ、かつ方言間で各語形式の意味が共通することが多いもの  
独立した方言記述の一部として、rNgawa (阿壩) 方言(孫宏開、王賢海 1987; 鈴木、イエシエムツォ 2006)、Babzo (包座) 方言(鈴木 2007b)、Kusngo (石壩子) 方言(華侃、尕藏他 1997)、Rangakha (新都橋) 方言(鈴木 2007a)、sKobsteng (格登) 方言(鈴木 2013b)、gSerkha (色卡) 方言(鈴木 2015)、Thamkhas (塔格) 方言(Suzuki & Sonam Wangmo 2017d)、Rithog (日頭) 方言(達珍拉姆 2020) など。総論として、孫天心(1995)、Suzuki (2009:89-90)、黄布凡(2012) などがある。
3. 比較的多くの語彙形式に現れるもの  
程章方言(意西微薩・阿錯 2008) や Myigzur (尼汝) 方言(鈴木 2014) がある。後者については、口蓋垂音の音対応関係がほぼ明らかであり、藏文で単独の初頭子音 k, kh, g をもつ形式のほとんどが口蓋垂音と対応する。

以上のうち、第1のタイプは口蓋垂音に規則的な藏文対応形式を認めることができ、かつ借用語(漢語、モンゴル語など)にも認められることから、その出現は音変化や借用の結果であると考えられる。しかし、第2のタイプのように、一定程度共通する語彙形式に藏文形式にさかのぼれない口蓋垂音が認められるという事実から、藏文とは異なって、古期に口蓋垂音が弁別的であったのではないかと考えられる。本稿では、詳細な比較は行わないが、将来の比較研究に資するように、Lhagang 方言における口蓋垂音をまとめて記述しておきたい。

## 2 Lhagang 方言の音体系

以下に Lhagang 方言の音体系を、音節構造・子音・母音・声調に分けて掲げる。子音体系には口蓋垂音も含める。

### 音節構造

最大の音節構造(分節音の配列)は次のようである。

$${}^c C_i GVC$$

このうち  $C_i$  (初頭主子音) と  $V$  (音節核の母音) が必須であり、 $C_i V$  を音節の最小構成とする。 ${}^c$  には前気音及び前鼻音が現れ、 $G$  には /w, j/ が現れる。

### 子音

主子音 (C<sub>i</sub>) 位置に現れる要素の一覧は以下のようなものである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前 後	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>		k <sup>h</sup>	q <sup>h</sup>	
	無声無気	p	t	t		k	q	ʔ
	有声	b	d	d		g	g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>		tɕ <sup>h</sup>			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>		ɕ <sup>h</sup>			
	無声無気	ɸ	s	ɕ	ɕ	x		h
	有声		z		ʒ	ɣ	ʁ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ		
	無声	m̥	n̥		ɲ̥	ŋ̥		
流音	有声		l	r				
	無声		l̥					
半母音	有声	w			j			

### 母音

舌位置による一覧は次のようである。

i	u	ɯ	u
e	ə	o	
ɛ		ɔ	
a		ɑ	

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している。

### 超分節音素

語単位として、次のピッチパターンが認められる。

ˉ: 高平

ˊ: 上昇

ˋ: 下降

ˊˋ: 上昇下降

### 3 Lhagang 方言の口蓋垂音

#### 3.1 具体例

筆者の記述に基づく限り、Lhagang 方言の口蓋垂音は老年層の語りの中に現れる。それらの若年層における対応形式と対照して、以下に整理する<sup>2</sup>。

語義	口蓋垂音を含む形式	口蓋垂音を含まない形式
[鳥の名前]	$\bar{q}\bar{o} \text{ t}\bar{c}\bar{o} \text{ ru}$	$\bar{k}\bar{o} \text{ t}\bar{c}\bar{o} \text{ ru}$
にわとり	$\bar{q}^o \text{ }^n\text{Go}$	$\bar{k}^o \text{ }^n\text{go}$
かわいそうな	$\bar{q}^h\text{o}?$	$\bar{k}^h\text{o}?$
異なる	$\text{'fi}a \text{ k}^h\text{e} \text{ t}\bar{o} \text{ q}\bar{o}$	$\text{'fi}a \text{ k}^h\text{e} \text{ t}\bar{o} \text{ k}\bar{o}$
ヤマウズラ	$^h\text{s}\bar{o}?\text{ qa}$	$^h\text{s}\bar{o}?\text{ ka}$
泥水	$\text{'t}\bar{c}^h\text{u} \text{ }^n\text{i: } \text{'n}\text{da: } \text{q}\bar{o}$	$\text{'t}\bar{c}^h\text{u} \text{ }^n\text{i: } \text{'n}\text{da: } \text{k}\bar{o}$
満ちた	$\text{'q}\bar{o}$	$\text{'k}\bar{o}$
野うさぎ	$\text{'r}\bar{o} \text{ q}\bar{o:}$	$\text{'r}\bar{o} \text{ }^y\text{o:}$
勅令	$^h\text{qa} \text{ }^h\text{o}?$	$^h\text{ka} \text{ }^h\text{o}?$

ほかにも、フィラーや擬音語にも現れる口蓋垂音があるが、音声学的なものである可能性もある(鈴木、四郎翁姆 2020) ため、除外した<sup>3</sup>。以上の資料が示すのは、口蓋垂音はそれをもたない話者の発話では軟口蓋音として実現されるということである。調音方法は「野うさぎ」を除いて閉鎖音として対応する。「野うさぎ」の場合、口蓋垂閉鎖音が軟口蓋摩擦音として実現される点で例外であるように見える<sup>4</sup>。

なお、老年層の発話では、筆者の収集した物語の中に限ってみた場合、口蓋垂音と軟口蓋音の間に次のような疑似最小対を認めることができる。

対象音節	口蓋垂音系列	軟口蓋音系列
$\text{q}\bar{o} / \text{k}\bar{o}$	$\text{'q}\bar{o}$ 「満ちた」	$^h\text{k}\bar{o} \text{ }^m\text{ba}$ 「足」
$\text{q}^h\text{o} / \text{k}^h\text{o}$	$\bar{q}^h\text{o}?$ 「かわいそうな」	$\bar{k}^h\text{o}$ 「彼/彼女/それ」
$\text{qa} / \text{ka}$	$^h\text{s}\bar{o}?\text{ qa}$ 「ヤマウズラ」	$^h\text{ka: } \text{bo}$ 「白い」

以上の例を踏まえると、口蓋垂音は軟口蓋音と音韻対立が認められるといえるが、口蓋垂音

<sup>2</sup> Dawa Drolma (2016) では、Lhagang 方言に口蓋垂音が認められる例として、 $/q^h\bar{a}/$ 「苦い」を記述している。これに対応する筆者の記述における表記では、 $/k^h\bar{a} \text{ mo}/$ となる(Suzuki & Sonam Wangmo 2015b)。筆者の収集した語りの中には、これに対応する語彙が含まれていない。蔵文では *kha mo* であるから、筆者の記録した形式は蔵文と対応している。一方、Lhagang 方言の周辺で話されるアムドチベット語では、 $/q^h\bar{a} \text{ mo}/$  (Shingnyag 方言、Suzuki & Sonam Wangmo 2016; gSerikha 方言、鈴木 2015) となる。

<sup>3</sup> たとえば、ぶたの鳴き声を表す擬音語は、カムチベット語の多くの方言で、口蓋垂摩擦音で実現される。擬音語のみに現れる音声現象は興味深いものの、それを音体系に含めないという判断から、本稿での議論の対象から外す。

<sup>4</sup> なお、口蓋垂摩擦音は、先の子音体系に示したように、有声音のみが現れる。ただし、擬音語類に現れることがほとんどである。

が現れる音環境は広母音または後舌母音に限定されているように見える。これが資料の不足に起因するものであるか音環境の制約に起因するものであるかは、現段階では不明である。

また、物語の語り手は確かに以上の語を言い分けるが、青年層の話者が口蓋垂音を軟口蓋音で発音しても、老年層の話者がそれを訂正することは、これまでの観察の限り、認められない。むしろ、日常会話では口蓋垂音であるべき音を軟口蓋音で発音することもある。青年層や中年層が口蓋垂音であるべき音を軟口蓋音で発音する実態を受け入れている可能性もある。

### 3.2 口蓋垂音の位置づけと解釈

先に口蓋垂音系列と軟口蓋音系列が対応することを示した。口蓋垂音をもたない話者の場合は単純であるが、筆者の収集した物語の語り手は、口蓋垂音をもつ話者であっても、日常会話では口蓋垂音を軟口蓋音と発音することがある。この現象をどのように解釈できるだろうか。

筆者の観察によれば、口蓋垂音が必ず現れるのは語りの形式による時のみである。語りと日常会話ではスタイルが異なり、形態統語の面で若干の違いが認められることは報告されている (Suzuki & Sonam Wangmo 2017b、鈴木、四郎翁姆 2019) が、スタイルが音体系にも影響しているといえるかどうかが問題である。そこで考えたいのが、語りの伝承に音変化を考えるという視点である。語りは口承であるから、現在の語り手が物語を聞き覚えたときの語り手すなわち現在の語り手よりも上の世代では、口蓋垂音は弁別的であって安定して発音されていたと考える。しかし、現在の語り手は日常会話において口蓋垂音を軟口蓋音で発音することがあり、弁別体系の一部をなしているとはいえない状況にある。この語り手から見て、2世代下にあたる第2著者を含む世代を調査対象として語彙を記録すると、そこには口蓋垂音が音声学的変異として現れることもなく、完全に軟口蓋音に合流したものと理解できる。その一方、Dawa Drolma (2016) の指摘する Lhagang 方言に口蓋垂音をもつ語が認められるという点は、その調査対象とされる中年層において口蓋垂音をもつ層が存在することになる。

以上に述べたことを、世代別に簡潔にまとめると、次のように示すことができる。

世代	口蓋垂音の状況
青年層	完全に軟口蓋音と合流して、音声学的変異としても現れない
中年層	完全に軟口蓋音と合流した話者とそうでない話者が共存
老年層	弁別的であったが、日常会話では軟口蓋音と合流を始めた
より上の世代	完全に弁別的であった

先に述べたように、Lhagang 方言の属する Minyag Rabgang 方言群にも、同方言の分布地域の周辺で話される言語にも、口蓋垂音はそれぞれの方言の音体系に認められる。Lhagang 方言のみが特別な音変化を経ているとあってよい環境にある。Lhagang 方言が他の方言と顕著に異なるのは、方言間の言語接触の深度である。Lhagang 方言はそもそも定住民の話す言語であり、分布地域が一定である。言語接触の対象となるのは牧畜民が話すアムドチベット語<sup>5</sup>であり、

<sup>5</sup> たとえば、鈴木 (2015) の記述する gSerkha 方言や Suzuki & Sonam Wangmo (2016) の記述する Shingnyag 方言などがあげられる。各方言の地理的な位置関係については、付録の地図を参照。

Lhagang 方言の分布域である塔公村に定住する者も最近の 20 年間で増えてきている (Sonam Wangmo 2019) もの、Lhagang 方言母語話者との往来については、定住よりも以前から交易や宗教行事などを通じて行われている。その結果、Lhagang 方言内部に一定の社会言語学的差異が生じている (Suzuki & Sonam Wangmo 2015b, 2017a)。しかしながら、社会言語学的差異が認められたとしても、青年層ではいずれの変種においても口蓋垂音は認められない (Suzuki & Sonam Wangmo 2015b)。口蓋垂音の弁別機能の消失に言語接触が影響している可能性がある一方、それを直接の原因と決定づけるには証拠が足りない<sup>6</sup>。

言語接触が口蓋垂音を失わせるという可能性については、参考事例が 2 つある。1 つは Suzuki (2008) の Ketshal 方言<sup>7</sup>である。Suzuki (2008) の記述では、口蓋垂音について閉鎖音系列が認められない体系を提示している。しかし、この記述は 1 人の話者を対象にして行われた調査に基づいており、周辺の諸方言の記述 (華侃、尕藏他 1997; 鈴木 2010) や Ketshal 方言の方言区域で今なお用いられる言語にも口蓋垂閉鎖音系列が認められる<sup>8</sup>ことから見て、口蓋垂閉鎖音系列をもつほうが自然であり、特定の 1 方言がそれをもたない、という見方は歴史言語学的、特に地理言語学的に説明を与えることは困難である。ここで問題になるのが、Suzuki (2008) の調査協力者の言語環境である。この調査協力者は言語形成期を Sharkhog 方言の区域で居住したものの、その後故郷を離れ、母語を用いない期間が長かった。その間に主に使用してきたものは共通チベット語 (蔵文 *spyi-skad*) であり、それに口蓋垂音は認められない。長らく共通チベット語の影響を受けた結果、口蓋垂音が軟口蓋音に合流した、という変化を個人語 (idiolect) として認めると、この現象には説明がつく。

もう 1 つは、鈴木 (2013a) の記述する九寨溝風景區周辺のチベット系諸言語である。この記述で取り扱う 6 地点の方言<sup>9</sup>のうち、3 地点でのみ口蓋垂閉鎖音が認められる。これら 6 地点は、それぞれ方言の系統的近さがあると考えられており、音韻や語形式について、多くの改新を共有している。しかし、口蓋垂閉鎖音に着目すれば、有無が分かる。この違いを地理言語学的観点から見ると、各地点の方言域における主要交通路に面しているか、また、観光開発が進んでいるか否かで分かれる。往来が頻繁な地域で話される変種が口蓋垂閉鎖音を持っていない体系となっている。この分布を考えれば、口蓋垂閉鎖音について、存在する体系から存在しない体系に変化したものと理解でき、その変化の要因に頻繁な往来に際して生じる言語接触を求めることが可能である<sup>10</sup>。

<sup>6</sup> むしろ、チベット系諸言語については、言語接触が音体系を複雑化する現象も認められる (鈴木 2018)。

<sup>7</sup> 分布地点は中国四川省阿壩藏族羌族自治州松潘県十里郷である。Suzuki (2008) では Sharkhog 方言と呼んでいるが、本稿では自然村レベルでの地点を方言名として用い、村名で掲げる。

<sup>8</sup> 第 1 著者の調査による。

<sup>9</sup> 分布地点はすべて中国四川省阿壩藏族羌族自治州九寨溝県漳扎鎮内にある。

<sup>10</sup> 同様の現象は、康定市に分布するカムチベット語にも認められるようである。Li & Suzuki (2020) の記述によると、同市東部の金湯河流域で話される Rongbrag 方言群に属する 2 つの方言は、口蓋垂音が子音体系に存在するものとそうでないものがあり、前者は主要交通路より遠い地域で話される。しかし、分布地域と口蓋垂音の有無の関連性については、調査を重ねて明らかにする必要がある。

以上に述べた2つの参考事例は、本来口蓋垂閉鎖音系列をもつ体系がそれをもたない体系の言語と長期にわたって併用という形で接触したことにより、失われたと解釈できる事例である。Lhagang 方言の場合、その直系にあたる上の世代の言語においても、共時的に接触している言語においても、口蓋垂閉鎖音系列が存在する点で、状況は同じではない。この点で Lhagang 方言の事例は、特筆に値するといえる。音変化の速度は単純に測ることができないが、共時的な状態として、世代差として認められる現象もある<sup>11</sup>。Lhagang 方言については、語りと自然発話という発話のスタイルの違いが音形式の実現と関連していることから、その中に世代差を認めるといふ解釈を行い、世代差が生じた一因に言語接触を挙げることができるだろう。ここでいう言語接触は、互いの言語特徴が直接的かつ双方向的に影響を与えるのではなく、話者が多言語環境におかれることにより音体系が簡素化される、具体的には口蓋垂音の軟口蓋音への合流を促す要因というように解釈する。

#### 4 まとめ

本稿では、筆者の記録した Lhagang 方言に認められる口蓋垂音をもつ語を記述し、口蓋垂音が存在しない音韻体系をもつ話者の場合の形式と対照した。そののち、口蓋垂音の現れについて整理し、発話のスタイルが関連していることを述べた。その現象を解釈するにあたって、現代の老年層の発話に見られる口蓋垂音が体系をなす一部であると考えよりは、むしろ口蓋垂音を失いゆく最初の世代ではないかと考えた。

Lhagang 方言の周辺に分布するチベット系諸言語・諸方言は、ほぼすべて口蓋垂音系列をもつ。この点を考えると、Lhagang 方言の音体系は特別であるように見える。しかしながら、Lhagang 方言はその社会言語学的環境から見て、地域方言として安定しているとは言えないため、そのような社会言語学的要因が口蓋垂音を失わせる一因であり、また、複数の音体系が並行して存在する状況を生み出す可能性にも言及した。

<sup>11</sup> チベット系諸言語については、鈴木(2011)におけるそり舌化母音についての議論がある。

### 付録：塔公鎮の自然村の分布

以下の地図は、Suzuki & Sonam Wangmo (2019:247) に基づく<sup>12</sup>。自然村のなかで、Lhagang と Thamkhas を除き、アムドチベット語の分布域である。Lhagang にはカムチベット語（本稿の記述対象）が分布し、Thamkhas にはカムチベット語とラゴン・チョユ語（Lhagang Choyu ; Suzuki & Sonam Wangmo 2017d）が分布する。



### 付記

本研究に際しては、2017-2020 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A) 「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774）および 2018-2020 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) 「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」（研究代表者：遠藤光暁、課題番号 18H00670）の援助を受けている。

<sup>12</sup> ArcGIS online を用いて、第 1 著者が作成したものである。



## 参考文献

- 海老原志穂 (2019) 『アムド・チベット語文法』 ひつじ書房
- 鈴木博之 (2006) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』第 35 号 39-47 URI: <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045547>
- 鈴木博之 (2007a) 「カムチベット語康定・新都橋 [Rangakha] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 2 号 131-162 URI: <http://hdl.handle.net/10108/51094>
- 鈴木博之 (2007b) 「チベット語包座 [Babzo] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 74 号 101-120 URI: <http://hdl.handle.net/10108/42695>
- 鈴木博之 (2010) 「ヒャルチベット語松潘・大寨 [Astong] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 5 号 117-155 URI: <http://hdl.handle.net/10108/64040>
- 鈴木博之 (2011) 〈在音變過程中產生又消失的軟顎化元音——雲南德欽燕門鄉穀扎藏語之例——〉《京都大学言語学研究》第 30 号 35-49 URI: <http://hdl.handle.net/2433/159068>
- 鈴木博之 (2013a) 〈九寨溝口内外藏語語音面貌〉《亞洲語言論叢》9, 37-76  
URI: <http://id.nii.ac.jp/1085/00001318/>
- 鈴木博之 (2013b) 「カムチベット語塔城・格登 [sKobsteng] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 8 号 123-161 URI: <http://hdl.handle.net/10108/75672>
- 鈴木博之 (2014) 〈尼汝藏語的小舌輔音與其藏文對應規律〉《東方語言學》第 14 輯 1-12
- 鈴木博之 (2015) 「カム地域のアムドチベット語・道孚県色卡 [gSerkha] 方言の音声記述」『京都大学言語学研究』第 34 号 89-107 doi: <https://doi.org/10.14989/218951>
- 鈴木博之 (2018) 「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 95 号 5-63 doi: <https://doi.org/10.15026/92458>
- 鈴木博之、イエシエムツォ (2006) 「アムドチベット語中阿壩 [rNgawa] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 1 号 59-88 URI: <http://hdl.handle.net/10108/51084>
- 鈴木博之、四郎翁姆 (2016) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ」『言語記述論集』8, 21-90 URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000897/>
- 鈴木博之、四郎翁姆 (2019) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における口承文芸の記録と言語分析」『言語記述論集』11, 17-38 URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00003018/>
- 鈴木博之、四郎翁姆 (2020) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における間投詞と談話標識」『言語記述論集』12, 31-41 URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00003694/>
- Dawa Drolma (2016) Investigating Minyag lexical features attested in Khams Tibetan in Minyag Rabgang: with a reference to the past and ongoing language shift. Paper presented at the 14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Bergen).
- Haller, Felix (2004) *Dialekt und Erzählungen von Themchen: Sprachwissenschaftliche Beschreibung eines Nomadendialektes aus Nord-Amdo*. VGH Wissenschaftsverlag.

- Li, Chunmei & Hiroyuki Suzuki (2020) Affricate series in Jintang Tibetan (Darmdo Municipality, Sichuan). *Kyoto University Linguistic Research* 39, 1-22. doi: <https://doi.org/10.14989/261910>
- Roche, Gerald & Hiroyuki Suzuki (2017) Mapping the Linguistic Minorities of the Eastern Tibeto-sphere. *Studies in Asian Geolinguistics VI—“Means to Count Nouns” in Asian Languages—*, 28-42. URI: [https://publication.aa-ken.jp/sag6\\_count\\_2017.pdf](https://publication.aa-ken.jp/sag6_count_2017.pdf)
- Sonam Wangmo (2019) A Tibetan village on the Sino-Tibetan borderland: A study of social organization, narrative and local identity in Lhagang. Doctoral dissertation, Universitetet i Oslo.
- Suzuki, Hiroyuki (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.1, 85-108. doi: <https://10.15144/LTBA-31.1.85>
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Origin of non-Tibetan words in Tibetan dialects of the Ethnic Corridor in West Sichuan. In Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*, 71-96, National Museum of Ethnology. doi: <https://doi.org/10.15021/00002558>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2015a) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par le Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* 32, 153-175. URI: [http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret\\_32\\_05.pdf](http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_32_05.pdf)
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2015b) Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: Vocabulary of two sociolinguistic varieties. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 10, 245-286. URI: <http://hdl.handle.net/10108/85072>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2016) Vocabulary of Shingnyag Tibetan: A dialect of Amdo Tibetan spoken in Lhagang, Khams Minyag. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 11, 101-127. URI: <http://hdl.handle.net/10108/89211>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2017a) Language evolution and vitality of Lhagang Tibetan: a Tibetic language as a minority in Minyag Rabgang. *International Journal of the Sociology of Language* 245, 63-90. doi: <https://doi.org/10.1515/ijsl-2017-0003>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2017b) *King's pig*: A story in Lhagang Tibetan with a grammatical analysis in a narrative mode. *Himalayan Linguistics* 16.2, 129-163. doi: <https://doi.org/10.5070/H916233598>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2017c) *Prince's wife become a lark* in Lhagang Tibetan of Khams. *Kyoto University Linguistic Research* 36, 71-91. doi: <https://doi.org/10.14989/230688>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2017d) Lhagang Choyu wordlist with the Thamkhas dialect of Minyag Rabgang Khams (Lhagang, Dartsendo). *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 12, 133-160. URI: <http://hdl.handle.net/10108/91144>
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2018) Two folktales in Lhagang Tibetan (Minyag Rabgang Khams): *Three Birds* and *Lark and Partridge*. *Asian and African Languages and Linguistics*

(AALL) 13, 131-150. doi: <https://doi.org/10.15026/92954>

- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2019) Migration history of Amdo-speaking pastoralists in Lhagang, Khams Minyang, based on narratives and linguistic evidence. In Bianca Horlemann, Ute Wallenböck, & Jarmila Ptáčková (eds.) *Mapping Amdo: Dynamics of Power*, 203-222. Orientální ústav.
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (to appear) *White mDzomo*, a folktale in Lhagang Tibetan of Minyang Rabgang Khams.
- Tsering Samdrup & Hiroyuki Suzuki (2019) Humilifics in Mabzhi pastoralist speech of Amdo Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 42.2, 222-259. doi: <https://doi.org/10.1075/ltba.17008.sam>
- 華侃、尕藏他 [sKal-bzang-thar] (1997) 〈藏語松潘話的音系和語音的歷史演變〉《中國藏學》第2期 131-150
- 華侃、龍博甲 [Klu-'bum-rgyal] (1993) 《安多藏語口語詞典》甘肅民族出版社
- 黃布凡 (2012) 〈藏緬語的小舌音〉《語言學論叢》第四十五輯 157-174
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- 邵明園 (2018) 《河西走廊瀕危藏語東納話研究》中山大學出版社
- 孫宏開、王賢海 (1987) 〈阿壩藏語語音中的幾個問題〉《民族語文》第2期 12-21
- 孫天心 (1995) 〈安多藏語的小舌輔音—藏語語音史上朝「立體對立」發展的一個個案研究〉《兩岸蒙古學藏學學術研討會論文集》495-516
- 達珍拉姆 [rTa-mgrin lHa-mo] (2020) 《藏語康定市日頭村話語音研究》中央民族大学學士論文
- 王雙成 (2012) 《藏語安多方言語音研究》中西書局
- 意西微薩·阿錯 [Ye-shes 'Od-gsal A-tshogs] (2008) 《程章藏語的音系》Paper presented at the Workshop on Tibeto-Burman Languages in Sichuan (Taipei) [In *Pre-workshop Proceedings*, 389-405].

## Uvular sounds in Lhagang Tibetan

Hiroyuki SUZUKI

Sonam Wangmo

### abstract

This article provides a list of words with a uvular initial in Lhagang Tibetan. Uvular sounds are only attested in narrative materials told by the elder generation. Our elicitation of words and sentences from speakers in the younger generation have not so far found any uvular sounds, even in their phonetic variation. The dialectal background of Lhagang Tibetan suggests that it might have had uvular sounds; hence, the present situation of Lhagang Tibetan implies that the target language spoken by the younger generation has lost uvular sounds and then been merged into velar counterparts.

The use of uvular sounds is primarily limited to speakers in the elder generation. Moreover, they appear especially in the course of storytelling, and not often in everyday conversation. For this phenomenon, we analyse that the elder generation is the first generation in which uvulars are disappearing. We point out that heavy language contact with other dialects is one of the crucial factors triggering their loss, focusing on the difference of the degree of losing uvulars among Lhagang Tibetan speakers in various generations.

受理日 2021 年 4 月 2 日